

## 2. 心のケア —カウンセリング3年目を迎えて—

スクールカウンセラー 古林康江

本年度は大街道小学校3年目という、子どもの「心のケア」の節目（阪神淡路での経験から）と考えられ、更に、個性に即した、支援法に力を入れ小学校教職員とともに一丸となって臨んだ。

### (1) 支援3年目を迎えて

被災より3年間が経ち子どもたちへの大災害後の度重なる余震や心や身体の被害を順に想起し、明記しておきたい。

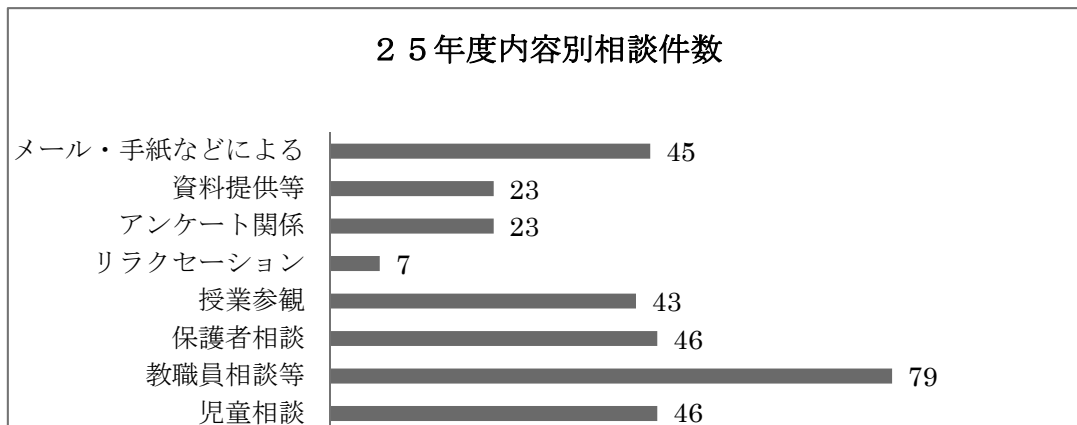
①1年目：長期にわたる避難所生活・健康障害～栄養の偏り・ヘドロ・粉塵・蠅や蚊の大発生・骨折する子の多発・平常授業への素早い切り替え・新入児の不登校の多発・児童の聞いてもらいたい、話したい長蛇の列・ボランティアの苦難3K・孤独死・バブリー（依存症：ギャンブル・物・食物…）震災離婚 etc. 子どもを取り巻く環境は大変なものであった。

②2年目：震災ラブ・2極化現象（いじめ～学校・地域・避難所での格差・仮設住宅や仮住まいの子が減少せず、落ち着かない家庭の増加・度々の余震による恐怖 ⇄ 慣れ（認知のバイアス？）噂 ⇒地球滅亡説・巨大隕石…ストレス ⇒やまない余震・食事の時間が待ちどうしいやおやつ時間が待ち遠しい子減少。当然であるが宿題をする環境が保証されない落ち着かない子の増加が見られた。

③3年目：アンケート調査高得点者2倍に。宮城県も石巻市も不登校中学校1年生全国1位（3.08%）そして依然として、やまない地震・長期間になってしまっている仮設や仮住まい生活・保健室へ身体の不調を訴える子の増加等々。小学校訪問の度に子ども達にやまない被害に心が痛んだ。親も限界が来たのか相談の中に不調を訴えることが多くなった。

本年はアンケート結果の高騰や相談件数の増加が顕著に見られ、それに伴い、地域への啓蒙活動として全戸配布のパンフレット～子どもたちに夢を・心に太陽を！～を養護教諭や児童と協働で作成した。

又、地域の要請で講演会～不登校児童への対応・心のケアの実際～を中心に開催し講師として参加した。特に宮城県（石巻市）では不登校児童生徒が全国1位となった為この対応には熱心な質疑応答がなされた。



### 25年度大街道小学校相談件数

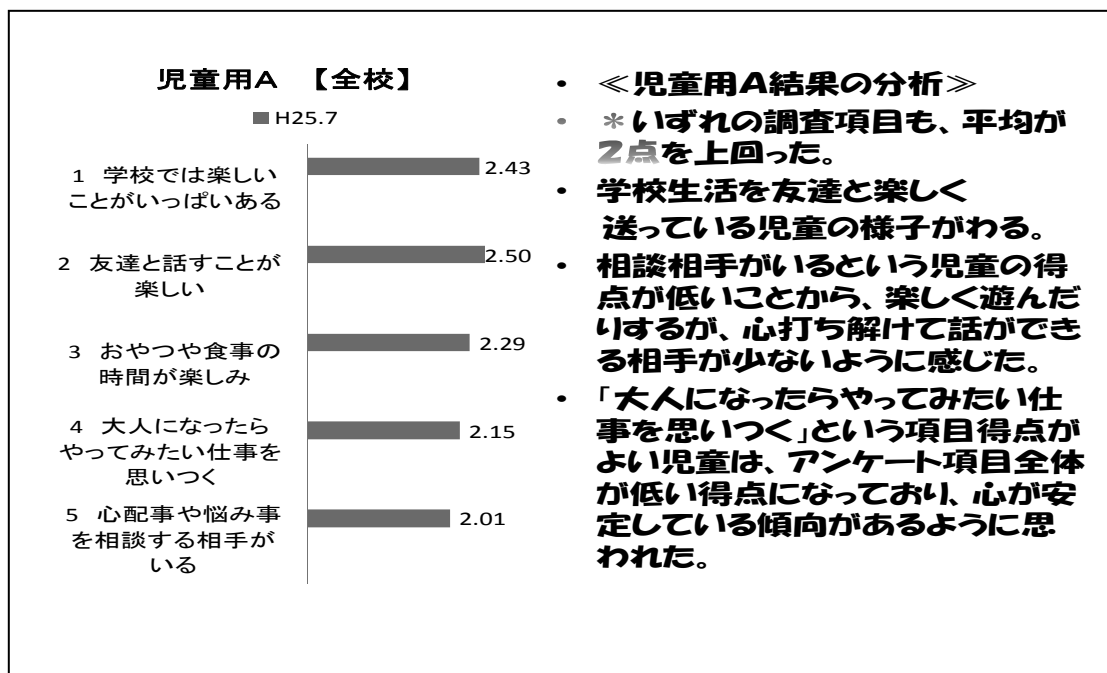
(\* 訪問:11回 カウンセリング:22日 サマーキャンプ付き添い:3日)

月	4月	5月	6月	7月	8月※	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計(24日間)
訪問回数	①	①	①	①	②	①	①	①	①	①	①	①	12回
児童相談	3	3	1	2	4	3	3	3	2	7	7	8	46
教職員相談等※	6	3	2	4	2	5	10	9	7	6	10	15	79
保護者相談	2	2	2	4	1	3	7	4	10	3	1	7	46
授業参観	5	4	2	3	0	6	5	3	4	3	5	3	43
リラクゼーション	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	3	7
アンケートにする相談等	2	1	3	5	0	1	2	2	0	0	2	5	23
資料提供等	4	4	0	2	0	1	2	1	2	3	2	2	23
メール・手紙等による相談	2	2	3	2	0	2	3	3	3	5	9	11	45
合計	24	19	13	22	7	21	32	25	28	29	38	54	312

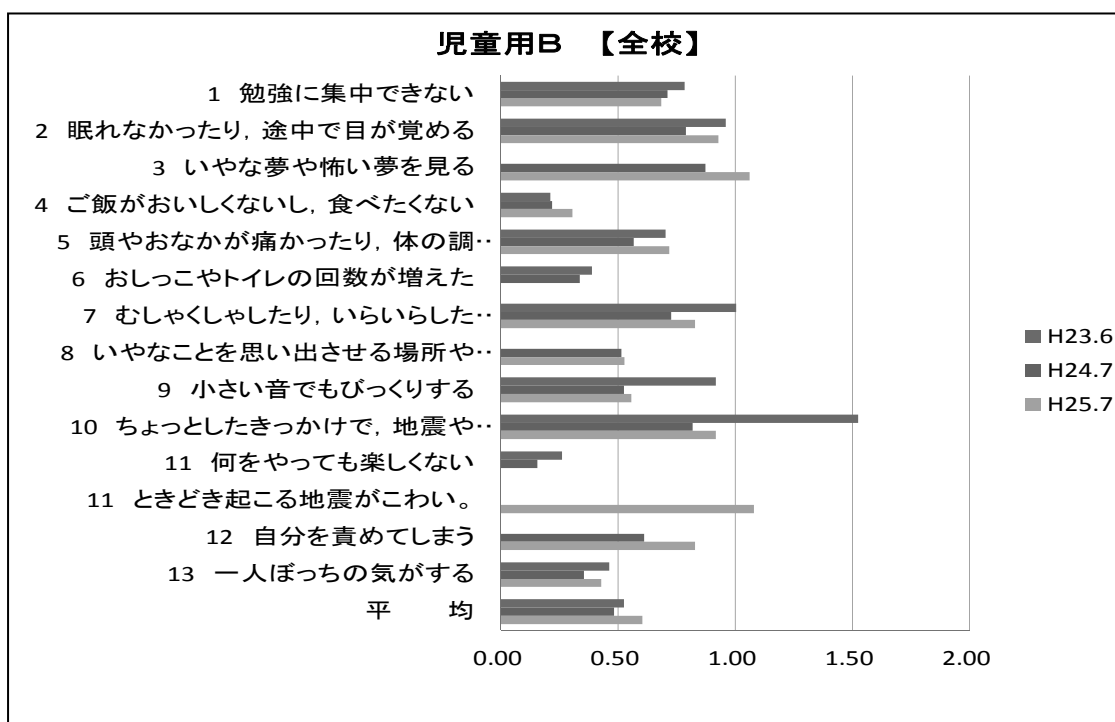
※教員等とのコンサルテーション・ミーティング・支援会議etc. ※8月サマーキャンプ付き添い

## (2) 平成 25 年度アンケート調査結果の分析

### ① A 検査の分析



## ② B 検査の分析



## 〈児童用 B 結果分析概要〉

平均値では、今回が一番高得点となった。

「時々起こる地震が怖い」「いやな夢や怖い夢をみる」「眠れなかったり途中で目が覚める」

「ちょっとしたきっかけで地震や津波のことを思い出してしまう」の項目の得点が高かった。

体調不良を訴えている児童が多いことから、保健室へ来室児童に対しては、丁寧に話を聞く必要性を再確認し合った。又以下

## 〈不登校の中学生、宮城県が全国最多 震災が影響か〉

学校基本調査で、昨年度中（2012年度）に中学校で不登校になった生徒の割合を都道府県別にみると、宮城県が最多だった。宮城県教委の7日の発表によると、県内の中学生全体の3・08%（前年度2.92%）が30日以上欠席していた。

全国平均は2.56%で、担当者は「東日本大震災の影響」として。全国では、昨年度中に不登校だった小学生が2万1175人（前年度比1447人減）で前年度比6%減。中学生（中等教育学校の前期課程含む）は9万1262人（同3574人減）で、4%減っていた。

宮城県の中学生の不登校は07年度以降、減少していたが、5年ぶりに増加に転じた。県内では、5千人超が仮設住宅から通学、県教委は「窮屈な生活が意欲の低下や将来の不安を招いている」としている。

被災地では、福島県が2.34%（前年度2.16%）と増え、\*岩手県は1.91%（同1.97%）とほぼ横ばいだった。

〈H.12年度県教委調べ〉

## (3) 講演会 同誌の第4部講演録を参照 (pp.239-253)

#### (4) 心のケア

「子どもたちに夢を」と題しパンフレットを製作し、平成 26 年 3 月 11 日に全校家庭へ配布  
(p.244 参照)

#### (6) 新聞掲載

##### 1) 信濃毎日新聞 10 月 22 日< PTSD 恐れの子倍増 >より抜粋

東日本大震災被災地の宮城県で松本大学（松本市）の学生が続ける支援活動の一環で、臨床心理士古林康江さん（安曇野市）が、同県石巻市大街道小学校の児童を対象に 7 月に実施した 3 回目のアンケート結果をまとめた。心的外傷後ストレス障害（PTSD）になる可能性が「ある」児童が 1 年前の約 2 倍になったことが分かった。余震や仮設住宅暮らしが長引くといった生活環境などが要因とみて、長期的な心のケアの必要性を指摘している。

松本大学の学生有志らは 2011 年 4 月に同小学校を拠点に支援活動を開始した。放課後に勉強を見る「学習支援」などに取り組んだ。古林さんは今年度も月 1 回、学生らと同小を訪れ、児童や保護者の相談に応じている。アンケートは全校児童 302 人の回答を得た。「いやな夢やこわい夢を見る」「いやなことを思い出させる場所や、人やものごとをさけてしまう」など 12 項目を、「よくある（3 点）」「ある（2 点）」「すこしある（1 点）」「ない（0 点）」の 4 段階で聞いた。高得点で PTSD になる可能性が「ある」は 12.6%（38 人）・・・ 以上抜粋

##### 2) 市民タイムス 有賀記者同行取材記事より抜粋

###### ①平成 26 年 3 月 11 日「届け善意の力」～被災児童の心をケア：松本大有志現地活動

\*「今度はいつ来るの?」「絶対また来てね!」の児童のことばに押されて・・・

\*自分たちが励まされる～大街道小学校で宿題を教える松大生たち。学生を心待ちにする児童も多い…

3 年を振り返り多くの皆さまのご協力によりこの事業が成り立っていることを感謝しつつ現地の子どもたちが一日も早く落ち着きを取り戻し、自分らしい「世界に一つしかない花」を咲かせる環境が整う様、祈らずにはいられない。

#### <保護者との相談>



#### <学習支援の学生と現地視察>

